

付けして、さらに問題が拡大した例もある。唯一、今すぐ取り組めることは、これ以上、新たな圃場に難防除雑草を侵入させないようにすることである。地域全体で発生実態情報を共有し、優先順位をつけて圃場周辺を含めた対策を立て、実行する必要がある。

すでに待ったなしの状況になっている難防除雑草問題に対して、分布拡大のリスクを推定することによる重点警戒地域の特定や侵入経路の解明、迅速な除草剤登録拡大や開発のための効果薬害情報の提供、除草機の開発、それらの体系化などの課題の解決に向けて、これまで以上に関係者の連携が求

められている。

参考資料

除草剤の使用に当たっては独立行政法人農林水産消費安全技術センターのページより、最新の登録情報を得て下さい。

<http://www.acis.famic.go.jp/index.htm>

特定外来生物については環境省の外来生物法のページを参照して下さい。

<http://www.env.go.jp/nature/intro/1law/index.html>

1. アレチウリ (特定外来生物) について

・警戒すべき帰化雑草「アレチウリ」
(農研機構)

https://www.naro.affrc.go.jp/publicity_report/publication/files/sicyos.pdf

2. ナルトサワギク (特定外来生物) について

・ナルトサワギクについて (農研機構)

http://www.naro.affrc.go.jp/org/niah/disease_poisoning/fireweed.html

・警戒すべき雑草「ナルトサワギク」
(農研機構)

http://www.naro.affrc.go.jp/publicity_report/pub2016_or_later/files/Senecio_madagascariensis.pdf

・ナルトサワギクに対するシロツメクサの抑制効果について (千葉県立中央博物館内千葉県環境生活部自然保護課生物多様性戦略推進室生物多様性センター)

http://www.bdcchiba.jp/publication/bulletin/bulletin05/rcbc5_1-narutosawagiku.pdf

田畑の草種

烏麦・燕麦・茶挽草 (カラスムギ)

(公財)日本植物調節剤研究協会
兵庫試験地 須藤 健一

イネ科カラスムギ属の越年生草本。春から初夏に出穂・開花する。草丈は30cm～100cmほど。日本全土の畑地や路傍、河川敷や荒地などに生育し、どこにでもありそうであるが、探そうとすると案外見つからない。

カラスムギは1つの小穂にふつう3個の小花をつける。それぞれの小花には4cmほどの長さの芒があり、基部から1cmほどのところで屈曲してよじれる。この小花を爪の甲に唾液をつけてのせ、息を吹きかけると芒を持った小花がお茶を挽くように回るといふ。だから茶挽草の名がある。

しかしこの芒は、お茶を挽くために回るものではない。カラスムギの芒には乾湿運動が確認されていて、乾湿が繰り返されることで芒は屈曲地点を中心に回転し、穎果を土の中へと押込む。カラスムギが獲得した「自然のゼンマイ」という巧妙な仕組みである。

植物和名に「カラス」とか「イヌ」とか付くものは、「にせもの」とか「食べられない」とか「役に立たない」といわれ、カラスムギもその1つであるとされるが、実際には十分に食用

足りうるし、古代ヨーロッパでは利用されていたようである。5,000年ほど前のヨーロッパで、麦畑の雑草であった野生型のカラスムギが栽培化されたものがエンバク。エンバクの小花はふつう2つ。熟しても穂から落ちず、包穎が両側へ開いた小穂はツバメが飛ぶ姿に似ることから「燕麦」と名づけられた。

日本では麦と一緒に入ってきたであろう史前帰化植物とされる。万葉人もカラスムギの小穂を見ながらツバメの飛ぶ姿を想像していたと思われるが、万葉集に歌はない。

万葉集には「麦」を詠った歌が2首ある。

馬ま柵せ越こしに麦むぎ食はむ駒こまの罵のらゆれど

猶なほし恋こしく思おもひかねつも (巻12)

馬うま柵せ越こし麦むぎ食はむ駒こまのはつはつに

新に肌はだ触ふれし児ころし愛かなしも (巻14)

この馬たちは、馬柵に閉じ込められながらもその柵を越えて麦を食べていたようである。当時、馬たちが食べていた麦は、おそらく大麦であろうと思われるが、ずいぶんとカラスムギが混じっていたことであろう。